まちづくり環境委員会　行政視察報告書

1　日程

令和８年８月５日（水）～６日（木）

2　視察先及び視察項目

	視察先	視察項目
1	佐賀県鹿島市	歴史まちづくりについて
2	福岡都市圏南部 環境事業組合 （福岡県春日市）	クリーン・エネ・パーク南部について

3　視察委員

○ 委員長	大　森　昭　彦	自由民主党大田区議団・無所属の会
○ 副委員長	小　峰　よしえ	大田区議会公明党
○ 委　員	伊佐治　　剛	自由民主党大田区議団・無所属の会
	鈴　木　ゆ　み	大田区議会公明党
	杉山　こういち	日本共産党大田区議団
	須　藤　英　児	大田区無所属議員団
	清　水　ち　こ	大田区無所属議員団
	小　川　あずさ	立憲民主党・無所属大田区議団
	奈　須　利　江	フェアな民主主義

４　視察報告

項目ごとに各会派の視察報告を記載。

（１）佐賀県鹿島市

◆視察項目

歴史まちづくりについて

（自由民主党大田区議団・無所属の会）



佐賀県鹿島市が取り組む歴史的風致維持向上計画および重要伝統的建造物群保存地区である肥前浜宿を中心とした歴史まちづくりの手法を学び、大田区における歴史的風致維持向上計画の推進や官民連携施策へ反映させることを目的に視察をさせていただいた。

鹿島市は人口約２万６千人の自治体で、30年以上前に住民の危機感から始まった自発的運動（保存運動）を起点とし、平成18年に肥前浜宿が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成30年に国の歴史的風致維持向上計画の認定を受けた。行政による保存修理補助（茅葺き9/10、工作物8/10など）や景観美装化などのハード面での整備、ＮＰＯ・酒蔵・大学・小学校が連携したイベント事業の実施などが特徴的な取り組みであった。特に「鹿島酒蔵ツーリズム」による大規模集客（２日間で10万人）や観光列車が停車する肥前浜駅の活性化、民間有力酒蔵による空家買取りと古民家活用（古民家宿・カフェ等）など、歴史的資源を軸とした自走型の街づくりが進んでいる。さらに、景観配慮型消火栓の設置といった防災対策や、職員制作動画によるＳＮＳ広報、多言語対応など実効性の高い取組を行っている。

大田区としても、今年５月に歴史的風致維持向上計画が国から認定され、今後は「歴史・文化をめぐり、訪れたくなる、ウォーカブルなまち」をめざしていく。住民、ＮＰＯ、地元企業、教育機関がそれぞれの役割を担い連携する鹿島市モデルを参考にすると共に、職員が出演・発信するＳＮＳ動画手法など大田区の魅力を伝えるＰＲ戦略の強化も考えていきたい。また、こうした取り組みを進めるためには財源も重要であり、今年度創設された国土交通省の新補助金の活用の可能性についても担当部局と検討を進めていきたい。

（大田区議会公明党）

鹿島市では、少子高齢化や歴史的建造物の老朽化、空家の増加などによる地域の衰退を背景に、「まちを残すには産業が必要」との危機感から、住民主体の地域活性化が始まった。

肥前浜宿の重要伝統的建造物群保存地区選定を契機に、歴史的風致維持向上計画に基づく歴史まちづくりが推進され、「保存」と「活用」を両立した持続可能なまちづくりが進められている。特に印象的だったのは、行政主導ではなく、地域住民の提案と熱意

を原動力として官民協働が築かれている点である。



現在は、ＮＰＯが移住促進や空家活用、イベント開催、観光ガイド等を担い、さらに佐賀大学と小学生が連携する町並み学習等を通じて、次世代の地域への愛着を育む取組も行われている。

また、酒蔵通りには全国チェーン店が出店せず、地域全体で景観を守るという住民意識が町並みに表れていたことも大変印象深かった。その結果、鹿島酒蔵ツーリズムは２日間で約10万人を集め、肥前浜駅への特急停車につながるなど、観光・交流・産業振興へと波及している。

さらに、歴史的建造物だけでなく、地域に受け継がれる「浮立獅子舞」などの伝統行事も歴史的風致として位置付けられている。

一方、祐徳稲荷神社、肥前浜宿、伝統行事などを結ぶ回遊性の向上は今後の課題であり、「歴史的建造物を守るだけでなく、（滞在時間や地域消費を生み出す）スローツーリズムの仕組みづくりが重要」との説明は大変示唆に富むものであった。

歴史的資源を核として、人材育成、産業振興、交流人口の拡大を生み出す好循環を実現している鹿島市の取組は、大田区においても、地域資源を活かした歴史まちづくりや地域活性化を進める上で大いに参考となる視察であった。

（大田区無所属議員団）

◇鹿島市の概要



●鹿島市は佐賀県の西南部にあり、福岡市と長崎市の中間に位置し特急を使えばＪＲ博多駅からＪＲ肥前鹿島駅までは約55分で到着できる。東には有明海が広がり、西は多良岳山系に囲まれ、自然環境にも恵まれ市内には歴史的価値の高い建造物が数多く存在している。面積は112.12㎢、令和８年７月31日現在の人口は26,575人である。

●観光面は、年間280万人の参拝客が訪れる日本三大稲荷の一つの祐徳稲荷神社や有明海の自然を生かした地域おこしのイベント「ガタリンピック」がある。

◇鹿島市歴史的風致維持向上計画

●平成31年３月26日に認定を受けている。

◇鹿島市の歴史を活かした歴史まちづくり

●ハードとしての建造物と、ソフトとしての人々の活動を合わせたまちづくり

◇鹿島市で見られる以下の４つの歴史的風致

①肥前浜宿に息づく人々の営みにみる歴史的風致

②祐徳稲荷神社参拝と地域の営みにみる歴史的風致
③鹿島城址と琴路神社の祭りにみる歴史的風致
④浮立と獅子舞に見る歴史的風致

◇浜中町八本木宿伝統的建造物群保存地区の街歩き

●15時気温37度の中、毎年３月末開催「酒蔵ツーリズム」のメイン会場として２日間で10万人以上集まる通りを歩くことが出来た。修繕・維持管理されている白壁土蔵造をはじめ歴史的価値の高い各種建築物を確認出来た。

◇大田区の歴史を活かしたまちづくりに活かす

◎大田区には国指定の重要文化財を有する池上本門寺や池上本門寺周辺の門前町、その他大田区内各所に歴史的・文化的資源が多々ある。しかし、建築物をはじめ街並みを維持管理するためには資金が必用であり、「歴史を活かしたまちづくり」のための継続した予算確保を働きかけていく。

（日本共産党大田区議団）



佐賀県鹿島市の歴史的風致維持向上計画の視察では、鹿島市役所建設環境部都市計画課より2006年に肥前浜宿の浜中町八本木宿と浜庄津町浜金屋町の２地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことが契機となり、歴史まちづくりに取り組むことになったとの説明がありました。その後、都市再生補助事業の補助率のかさ上げがあり、歴史まちづくり法における歴史的風致維持向上計画を策定し、2018年度に認定され、2019年度より各種事業を開始、2019年度から2028年度までの10か年間計画で進められてきました。

歴史の街並み、景観を維持管理する歴史的建造物保存対策事業、伝承芸能の公開支援事業、祐徳稲荷神社参拝回遊環境整備事業、歴史ガイドブック作成事業を展開しています。肥前浜宿では、ＮＰＯ水とまちなみ会やＮＰＯ肥前まちづくりデザイン研究会などが、イベントの企画や観光ガイド、観光案内を担っています。また、小学校などでの総合学習に「まちなみ学習」を取り入れて、幼少期からまちなみ保存への意識醸成に努めています。酒蔵が空家を購入し、宿泊施設やレストランにするなどの開業には商工部門から補助金を出しています。酒蔵ツーリズムのイベントが３月末に２日間開催しますが10万人近くが訪れる企画になっているそうです。酒蔵と茅葺の家屋の街なみを国の支援を活用し、最初の計画を伝承しつづけています。大田区には馬込文士村や勝海舟記念館、大森貝塚、池上本門寺など歴史的な文化財があり、この財産を有効活用するには佐賀県鹿島市の取組を参考にしながら進めていくことが求められます。

（立憲民主党・無所属大田区議団）



訪れた佐賀県鹿島市は、水に恵まれ米作りやみかんなど農作物も豊富な地域です。

鹿島市は平成18年に肥前浜宿の２地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことをきっかけに、歴史まちづくりに取り組みました。

道路を明るい色に美装化し、2011年インターナショナルワインチャレンジでチャンピオンサケを地元のお酒、鍋島大吟醸が受賞したことで、酒蔵通りをメイン会場にした「鹿島酒蔵ツーリズム」が開始され、年間約10万人が来場するまでに発展していきました。

まずは民間主体で酒蔵を使ってコンサートを行うなど人を集めて楽しんでもらう空間を提供していったことで、訪れる人が徐々に増えていったということです。

地理的には鹿島市の駅は、2022年開通した西九州新幹線からそれていたことで不利であったにもかかわらず、ＪＲ九州の人気観光列車、ふたつ星や36ぷらす３の停車駅として、多くの人々をお酒やおいしい食事でもてなしすることで、歴史的な街並みを壊すことなく、多くの人を呼び込むことに成功しています。

実際に私たちも歩いてみましたが、非常に暑い日だったにもかかわらず、きれいな水が道路沿いに流れており、その音や流れの美しさを見ながら歩けて、通りに面して歴史的建物が保存修理されていて、不快な暑さを感じることなく気持ちよく散歩のできる街並みで、たくさんの人が訪れるようになってきた理由がわかりました。

私たち大田区でも、新しいものを次々作っていくのではなく、今あるものを大切にし、歴史を感じてもらいながら、街を見て回れるような工夫をしていくことが、多くの方に訪ねてもらい、好きになってもらえるのかなと今後のまちづくりに向けての参考になりました。

（フェアな民主主義）

佐賀県鹿島市は、多良岳山系の山々と有明海の干潟に囲まれた自然豊かな風土を基盤に、農林業が栄えてきたまち。それら、一次産業や神社、祭事などを中心に形成されてきた歴史的街並みが、人口減少や産業構造の変化とともに、空家化するなどしていたところ、市は、平成18年に肥前浜宿の２地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことを契機に、これら歴史的資源を生かしたまちづくりに取り組んでいる。修復した肥前浜宿を歩かせていただいたが、非常に美しい。

この美しいまち並みを整備するため、国の補助に加え市独自補助も加えた８～９割の建造物や工作物への保存、修理・修復への補助、かやぶき屋根や土蔵、塀や門や石積みなどへの２/３以内、限度額６百～２百万円の補助を行っている。地価が東京に比べ安いことを考えると、かなり大きな助成となる。建物の整備は、固定資産税の増収につながる一方で、所有者にとっても固定資産税の負担が生じることになる。

こうした背景から、市は、まちを美しくするだけでは住み続けることが難しいため、美味しい米、きれいな水を生かした酒造など、人を呼び込み、新たな産業を生み出す地

域活性化に結び付けた取り組みを行っている。毎年、酒蔵ツーリズムには約10万人が訪れるなど、イベント効果が表れている一方、宿泊施設が無いことが課題。それでも鹿島市は、平成27年国勢調査で第一次産業は減少傾向にあるものの14.2%で県内10市中最高。第二次産業25.7%、第三次産業60.1%。当区の場合、一次0.1%、二次20.3%、三次79.5%で、生業に結び付けるのは非常に難しい。

いずれも平成27年国勢調査。たとえば、池上本門寺周辺の歴史的建造物を、失われつつある和風建築の需要地として位置付け、区民生活における内装・外構・インテリア等（畳・表具・生垣）の和の価値を提供する循環の仕組みを作れば、地域創生にならないか。



（２）福岡都市圏南部環境事業組合（福岡県春日市）

◆視察項目

クリーン・エネ・パーク南部について

（自由民主党大田区議団・無所属の会）



清掃工場における課題解決（排煙・環境対策や施設維持等）に資する先進的な取り組みについて学ぶため、５市（福岡市、春日市、大野城市、太宰府市、那珂川市）による広域行政モデル「福岡都市圏南部環境事業組合」を訪問し、広域化の背景、施設運営、環境対策などについて調査した。

福岡都市圏南部環境事業組合は、高額な建設費等の財政課題を背景に施設の共同集約化を図り設立された。中間処理施設「クリーン・エネ・パーク南部（510t/日）」と最終処分場「グリーンヒルまどか（容量51万m^3）」を一体運用している。現在は２炉運転（１炉は待機・増量時運用）を基本とし、余剰キャパシティを災害廃棄物受入等に活用できる体制を整えている。また、昭和期からの歴

史を持つ夜間収集への柔軟な受け入れ対応や、各市搬入量に応じた分担金方式など、複数自治体による安定的な協働体制が確立されている。

燃焼熱を利用した最高16,700kWの蒸気タービン発電（約２万１千世帯分）や太陽光・風力発電によるエネルギー回収、多段階排ガス処理や臭気・排水の循環利用など環境への配慮が行われている。稼働当初の粗大ゴミ火災を契機とする消火体制の強化や分別の徹底、浸出水を外部へ漏らさない最終処分場の水処理体制など、安全・安心への徹底した取り組みがうかがえた。

夜間収集体制や体験型環境教育（搬入量年１～２％減の成果）の工夫は、大田区においても施設維持や啓発施策に非常に有効的である。福岡都市圏南部環境事業組合が抱える25年経過後の最終処分場のあり方や、将来のゴミ量減少に伴う規模適正化といった課題も注視しつつ、今後の大田区の持続可能な清掃事業の推進に生かしていきたい。

（大田区議会公明党）



福岡都市圏南部環境事業組合は、福岡市、春日市、大野城市、太宰府市、那珂川市の５市で構成され、クリーン・エネ・パーク南部において可燃ごみ等の中間処理を行っている。

家庭ごみは夜間に収集され、１日約170台の収集車が搬入する。ごみピットは最大3,600トンを貯留でき、可燃ごみは処理能力計510トンの焼却炉で900度以上を保ちながら焼却される。焼却灰は元の量の約10分の１まで減容され、鉄類は選別・リサイクルされる。また、焼却熱による発電は最大16,700kW、約21,000世帯分に相当し、施設内で利用するとともに余剰分を売電している。排ガスや排水についても適切な処理・循環利用を行い、24時間体制で環境対策を講じている。

特に参考となったのは夜間収集で、カラスや猫によるごみ集積所の荒らしは発生していないとのことであった。本区では日中収集であり、カラス等の被害や収集車による交通への影響も課題であることから、コストや作業員の労働環境等も含め、収集時間帯による効果を研究したい。

焼却灰の埋立地は、令和22年度時点で約50％が埋まる想定で、その後の継続利用等は今後の検討課題とのことであった。また、事業費は構成市のごみ搬入量等に応じて負担している。広域処理では施設設置市の環境・交通面の負担も考えられるため、地元自治体への配慮や構成自治体間の公平な負担のあり方についても、今後さらに調査を深めたい。

（大田区無所属議員団）



福岡県春日市に位置するごみ焼却処理施設（清掃工場）クリーン・エネ・パーク南部（福岡都市圏南部工場）を視察し、工場見学の際に個人的に質問した内容を元に、４点「ゴミ回収」「電力供給」「埋立技術」「減容化」の特徴的な点についてまとめた。

（1）ゴミ回収

夜１時からおおよそ４時頃まで夜間収集を行っており、深夜収集は、交通渋滞を作ることにも繋がらず、渋滞を避け、スムーズに収集することが可能である。

→本区においてもゴミ捨てが有料となり、個別収集になった暁には、夜間収集を参考・検討したいと感じた。

（2）「電力供給」

ごみを燃やす熱でタービンを回す「廃棄物発電（余熱発電）」は、工場内で使用する電気（照明や機械の駆動など）に利用し自給自足を実現し、余剰となった大量の電力を、外部の電力会社へ売電しているとの事。

→大田区は小中学校に届け有効活用しているが、本施設では地域への直接的な還元はされてはいなかった。

（3）「埋立技術」

焼却灰の埋め立ての技術「福岡方式（準好気性埋立構造）」は、ローコストでメタンガスや悪臭の発生を抑えることができ、分解期間も短縮し、土へ還す技術である。

→土へ還す技術は海面埋立を行っている東京においては適さない。また盛土になることで地盤が脆弱になるため、陸地埋立は不向きである。

（4）「減容化」

大田区では燃やした後に残った灰を、更に灰溶融施設にて超高温で溶かし、最終的な埋立ボリュームを30～40分の１にまで減らしているが、本施設では現状はゴミの量と設置機器の採算性を考慮した結果取り組んでいないとの事であった。

むすび

「夜間収集」の事例は、大変有益な知見となった。また発電に利用しきれなかった「残り約８割の熱エネルギー」の有効活用についても今後の検討課題となり、地域還元の拡充と高効率なシステム構築を考える機会となった。

（日本共産党大田区議団）

福岡都市圏南部工場（クリーン・エネ・パーク南部）は春日市大字下白水に所在し、福岡市（南区）・春日市・大野城市・太宰府市・那珂川市の５市で構成する福岡都市圏南部環境事業組合で管理運営している可燃ごみ処理施設です。燃焼したごみの焼却残さは大野城市にある最終処分場の「グリーンヒルまどか」で埋め立て処分をしています。

５市の人口60万人が出す１日約275tの燃えるごみを一挙に処理をするために１基170ｔの処理能力の焼却炉が３基あり、常時２基を24時間、365日稼働させています。燃焼

ガスでタービンを回し発電しており、発電量の30％は処理工場の施設・設備に使用し、残りの70％を売電しています。年間６億円の売り上げになり、設備の更新のために積み立てています。両施設の運営期間は2016年度から2040年度の25年間使用する計画で現在11年目です。最終処分場の埋立容量は51万６千㎥で2025年度末現在で約10万５千㎥・埋立率20.27％となっています。最終処分場の敷地は採石場であった場所を有効利用しています。環境に配慮し防水処理したうえで残さを埋立処理しています。

施設での火災を防ぐためリチウムイオン電池など混入を防止する対策として、啓発と搬入するごみの検査体制も整えています。一般家庭からの可燃ごみの持ち込み時に金属探知機などで検査をしています。

小学４年生の社会科の見学コースになっていて、５市3,700人の生徒が毎年訪れています。小学生の感想文には、ゴミを減らすことで温室効果ガスの排出量を減らすことが出来ること、また、ごみを減らす取組の３Ｒ（リデュース、リユース、リサイクル）の意識づけができています。

大田区としてもごみ問題を広く区民に啓発し、また、学校教育の場でも地球環境の問題と捉えてごみを減らす取組の３Ｒ（リデュース、リユース、リサイクル）の意識づけを更に進めることが必要と思いました。

（立憲民主党・無所属大田区議団）

国鉄時代からその名を残すＪＲ九州特急リレーかもめに乗り、鳥栖駅乗り換えで福岡県大野城市に移動し、クリーン・エネ・パーク南部を訪ねました。

ここは、春日市と最終処分場のある大野城市、そして太宰府市、那珂川市、福岡市南区の可燃ゴミを適正に処理する中間処理施設及び最終処分場を共同で建設し運営することを目的にできたものです。

ここでは、１日510トン収集車250台分を処理でき、ダイオキシン発生を防ぐため、内部を900度に保っています。実際に上からゴミが貯められていく様子を見せてもらいましたが、底が遠く怖いくらいの高さで、ものすごい量の処理能力だと感じました。

ゴミの焼却による熱を利用してできた電力は施設で使いますが、余ったものは電力会社に売っており、その額は年間６億円にもなっているとのお話でした。

この施設はこどもたちの環境教育にも協力していて、シアタールームで行われるゴミの目線で処理の流れを勉強するビデオは、私たちも見せてもらいましたが大好評のようで、楽しくゴミのことを学び、こどもたちが今後もゴミから環境について考えていったり、より学んでみようとの気持ちになる基礎を作っているようです。

担当者によると、ここに集められたゴミは住宅街が多いため、かなり分別がしっかりしているとのことで、順調に運営が進んでいるとの事でした。

また、常にキャパを満杯にすることなく、災害が起こったときに、他の自治体の協力などもできることも含めて対策をしているとの事でした。

生きていく限り切り離せないゴミの問題、私たちも今回の視察を参考にしながら、今後も私たちの街のゴミ処理についても考えていきたいと感じました。

（フェアな民主主義）



福岡市の南部に位置する、春日市、大野城市、太宰府市、那珂川市の４市から福岡市に共同処理の相談があり、福岡市の南区と４市が福岡都市圏南部環境事業組合を設立し、可燃ごみ処理施設の設置、管理運営、最終処分などを行っている。事業組合設立前に春日市に福岡市が保有していた２つの清掃工場のうちの一つが立地していた場所で、170ｔ×３炉を有する清掃工場。第一種住居専用地域に隣接し、周囲に大きな商業地域があるため、用地を福岡市から取得し、整備する際に、北部に広大な広場、南部にコミュニティ広場を配するとともに、環境学習機能を備え、小学生などの環境学習の場として活用している。煙突80ｍもその結果と思うが、同じ住宅地に隣接する多摩川清掃工場は100ｍと更に高く、一組の環境配慮を知ることができた。都市生活において必須でありながら、ＮＩＭＢＹに象徴されるように、どこに立地するかが非常に難しい清掃工場は、厳密に新設では無いが、地域への環境配慮から周囲に広場を設け、環境学習施設として位置付けているのは、大切な視点だと感じた。一方で、小学生向け動画に、「有害物質オールクリア」という表現があるなど、環境学習が、現在の基準値を満たしているので、問題ないという理解を小学生に与えるに留まっていて、より良い環境、より良いごみ処理の有り方を考える余地のない学習になっていた。この施設に限ったことではないが、残念だと感じた。

一方、福岡市の清掃事業としてみると、この事業組合と直営との二つの公共団体が３つの焼却施設でごみ処理を行っている特殊な方式を採用している。人口が集中してスケールメリットが期待できる都市部の直営と、周辺部を統合する形でＰＦＩのＤＢＯ様式で事業組合が担う場合との、コスト比較などに興味があったが、質問して出てきた資料は、比較できる様式になっていなかった。自治体間比較できるデータの取り方になると良いと思った。

